

マサチューセッツ州に於けるテキスタイルワークの研修 及び個展開催に関する報告

Report on a Textile Art exhibition by Emiko Tosaka
and a study on textile works in Massachusetts

戸 坂 恵 美 子
Emiko TOSAKA

I は じ め に

私は、平成 7 年 3 月、北海道女子短期大学の姉妹校である米国のエンディコットカレッジ(マサチューセッツ州ベバリー市) のリチャード・E・ワイリー学長の招聘をいただき染色作品による個展、-Textile Art by Emiko Tosaka-を開催する機会に恵まれた。

同時に平成 6 年度の北海道女子短期大学における教員特別研究費、及び北方圏交流基金の助成を受けて、かねてより強い関心を抱き研究テーマとしている「北方圏に於ける暮らしの中のテキスタイルアート、及びテキスタイルデザインの調査と研修」に基づく研修の一環としてマサチューセッツ州に於けるテキスタイルワークの研修を実施した。以下はその報告である。

尚、本報告はすでに北海道女子短期大学研究紀要第 16 号、29 号に次ぐ北方圏に於けるテキスタイルワークに関する報告の Part III である。(註——テキスタイルデザイン・テキスタイルアートの両者を示す時、テキスタイルワークと記す)

II 研 修 内 容

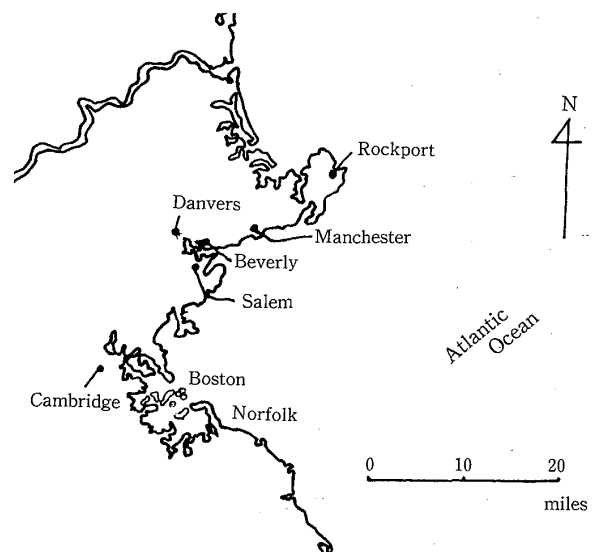
1. 研修地

今回の研修は個展の開催地ベバリーを中心として下記の各地を訪れ美術館、博物館、市中のギャラリー、エンディコットカレッジの織物教室、周辺的一般家庭等を見学した。

研修地

- ・ボストン
- ・ベバリー
- ・セーラム
- ・ロックポート
- ・マンチェスター・バイ・ザ・シー
- ・デンバーズ

図 1



2. ボストン美術館におけるテキスタイルワークについて

アメリカの古都ボストンはヨーロッパの雰囲気漂う落ち付いた街である。中世の建築を偲ばせる尖塔のある教会やレンガ色のクラシックな建造物、カラフルな帆をはるヨットの並ぶ海岸線の風景、近代的なビル街やダウンタウンのにぎわい、古いものと新しいものが入り混じってほどよく調和した興味深い街である。そして又、学問と芸術の都市でもある。ボストン茶会事件でも有名であり、1776年には独立宣言がこの地で読み上げられる等アメリカ独立史の舞台ともなった街である。

ボストン美術館は1876年7月4日アメリカ独立100年祭の日に当時の市民の強い願いが実現してコープリスクエアにオープンしたのである。その後、年々収蔵品が増加したため1909年に現在の場所、ボストン市の南西ハンティントン・アヴェニューに面して建築されている。現在の美術館は最初に建築されたギリシャ神殿のような貴品のある建物と1981年に建築が完成した近代的な西館とで構成されている。新旧二つの建物が違和感を感じさせずに調和している。これは丁度古いものを尊重しながらも新しいものへも積極的に目を向けるボストン人の気風の現れのように見える。

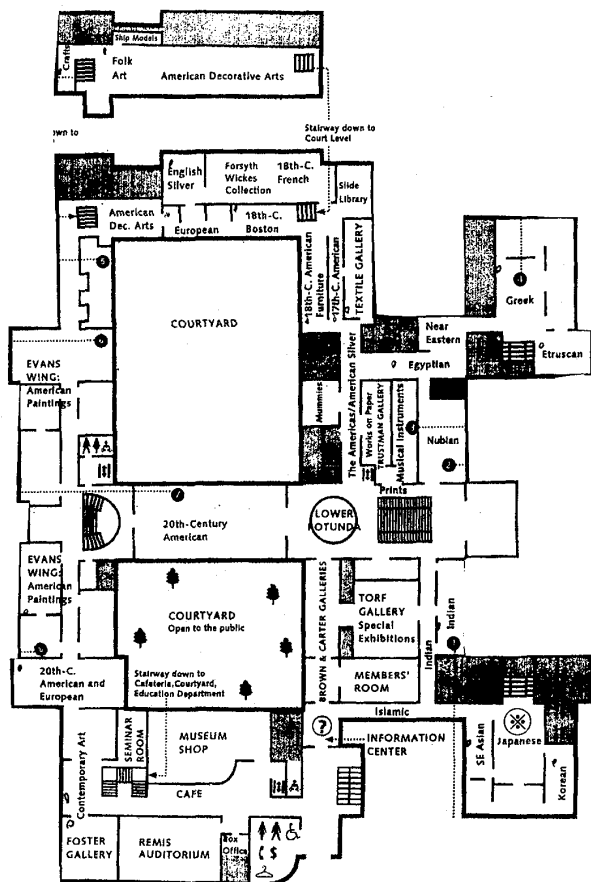
言うまでもなく、このボストン美術館はパリのルーブル美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館、サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館に並ぶ世界四大美術館の一つである。

コレクションも東洋美術、エジプト美術、ギリシャ・ローマ美術、ヨーロッパ装飾美術、アメリカ装飾美術、絵画、彫刻、素描、染織、版画、写真、現代美術等、多岐にわたっている。

私はこの美術館を訪れるのは今回で4回目なのだが毎回各部門毎に陳列が変わっていて異なる作品に接しその収蔵品の豊かさと質の高さに感心する。中でも私の目的であるテキスタイル関係はヨーロッパの装飾美術であるタピストリーやコスチュームは勿論のこと、東洋美術のコレクションで名高いこの美術館だけあって日本の染織工芸の作品も数多く、優れたものが収蔵されている。例えば私が初めてここを訪れた時は日本の江戸文化を象徴する小袖の素晴らしいものが沢山展示されていた。日本国内でも特別展でない限りこれだけ揃って鑑賞できることはなかなか難しいのではと思い、またその美しさに目を見張った事も記憶に新しい。東洋に関心の強い個人コレクターの寄贈によるものと聞いて更に驚いたものである。次に訪れた折には日本の手織り機が並んでいた。その中には珍しい「いざり機」が陳列されていた。3度目の時には藍染めの作品、風呂敷・のれん・旗等々……。今回は紅型や緋そして前述の小袖等……自国を離れて改めて日本の染織技術の素晴らしさを再発見した思いであった。

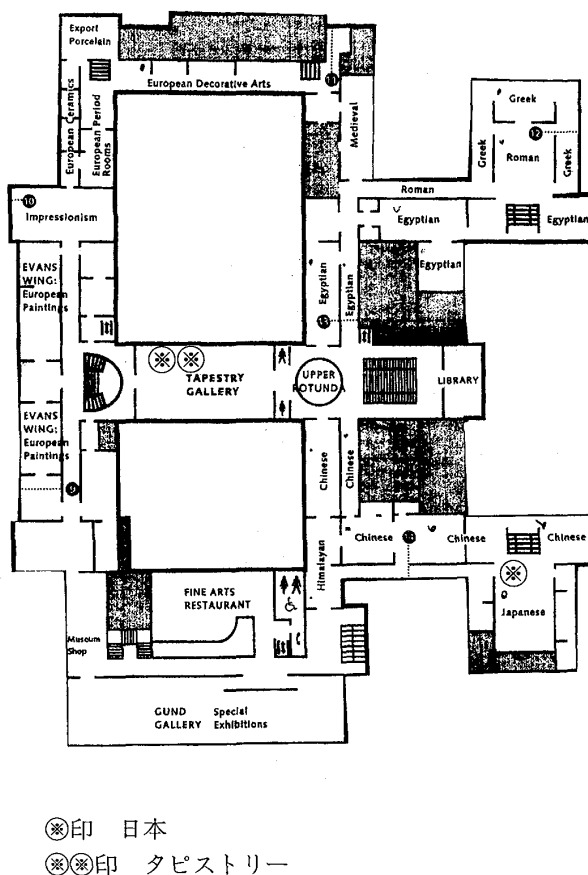
又、ボストン美術館の重要なものとしてペルーの織物がある。これは世界的なコレクションのひとつと言われる程で特にタピストリーが素晴らしい。16世紀17世紀のものが秀逸である。ペルー初期の織物と刺繍作品は紀元前の古いものから16世紀の中頃までのものがある。またパラカス文化の刺繍の作品を見ることもできて感激した。もうひとつインドのテキスタイルも17～20世紀初期の織物、刺繍、プリント、綿布、手描き染織、カシミヤのショール等々大変に

図2 美術館平面図1 F



⊛印 日本

図3 美術館平面図2 F

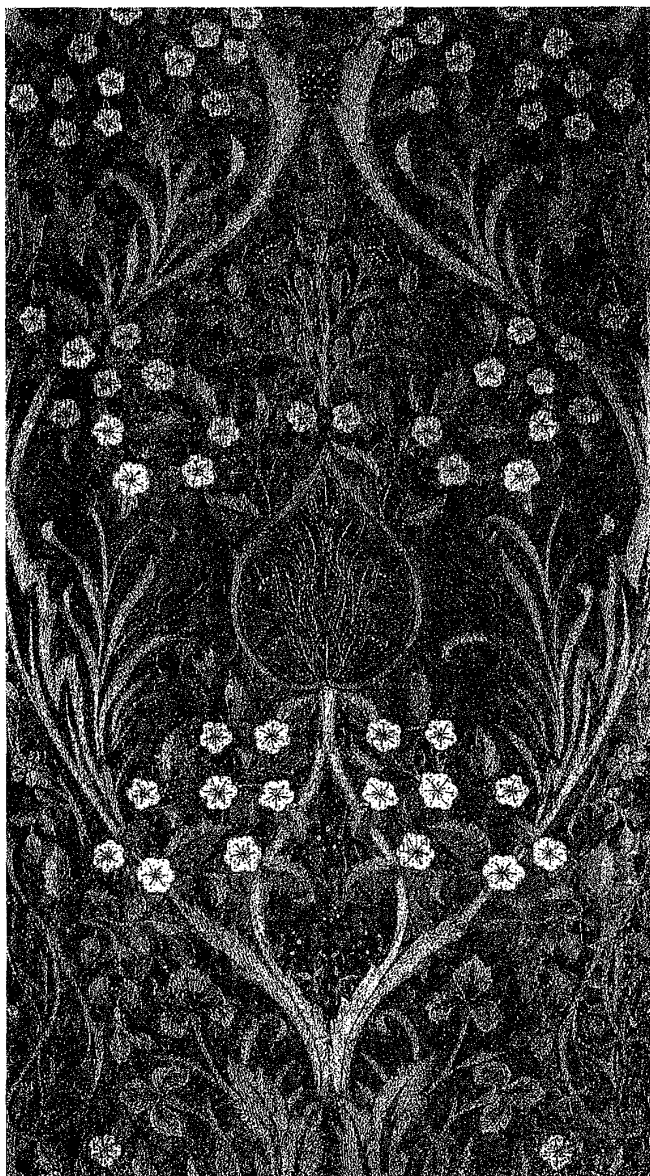


⊛印 日本
⊞印 タピストリー

興味深い作品が数多く収められている。

尚、この部門で見落としてはならないものに美術館創立100年目の1970年に収蔵品となったペルシャの絹織物「狩の絨緞」がある。これは16世紀のもので世界の織物の中で最も優れたものとしての高い評価を得ているものである。このようにボストン美術館のテキスタイル部門は織物、捺染、刺繍、レース等、種類の豊富さと質の高さに於て世界で指折りのコレクションとして知られている。このコレクションが充実したのは19世紀に入ってニューイングランド地方の経済成長に伴い、紡績工場も次々とでき生産高も伸びこの地方の重要な産業となったのであるがそれを更に、芸術的なレベルへと高めるために美術館のテキスタイルワークの収集に力を注いだためである。

写真1 ゴブラン織タピストリー



美術館パンフレットより

写真2 小袖 (日本)

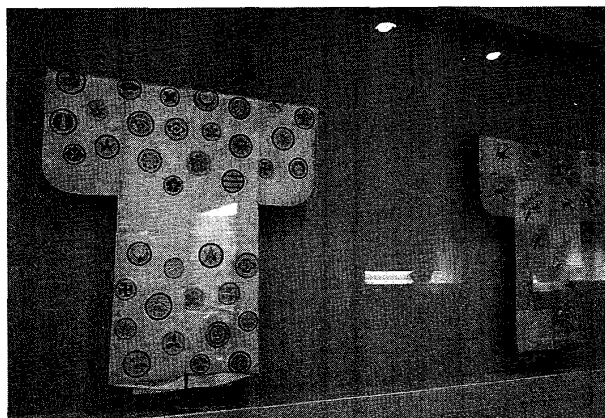
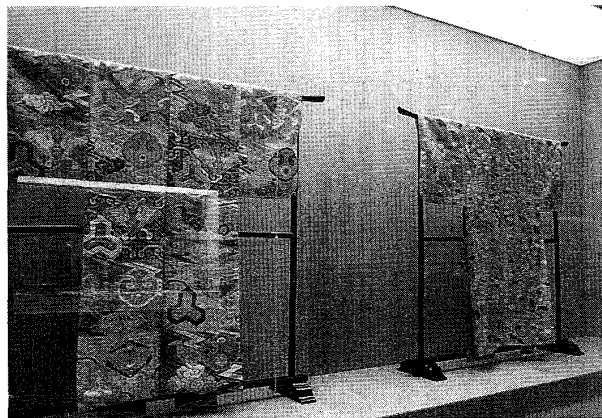


写真3 小袖 (日本)



3. イザベラ・S・ガードナー ミュージアムのテキスタイルワーク

この美術館はイザベラ・S・ガードナー夫人の個人収集品のミュージアムである。

15世紀のベニス宮殿風の建物で、美しい中庭を囲んで回廊とバルコニーが続いている。

絵画、彫刻、工芸、織物、楽器、家具、陶器等が展示されているがガードナー夫妻の卓越した審美眼によって選択された2,000点以上の芸術品が収蔵されている。テキスタイル関係も数多く、タピストリー、コスチューム等大変に興味深い。2階のタピストリー・ルームには15世紀から17世紀にかけての見事な10枚のタピストリーが展示されている。中でも15世紀スペインのペイメイホウの「St. エングラシア」や16世紀のものが大変素晴らしい。そしてこの部屋ではさすがボストンならではと思ったのであるがクラシックのコンサートが開かれると聞いた。中世のタピストリーに囲まれてクラシック音楽に浸れるとは何とロマンチックなことであろう。

写真4 ローマ・ギリシャ彫刻もある美しい中庭

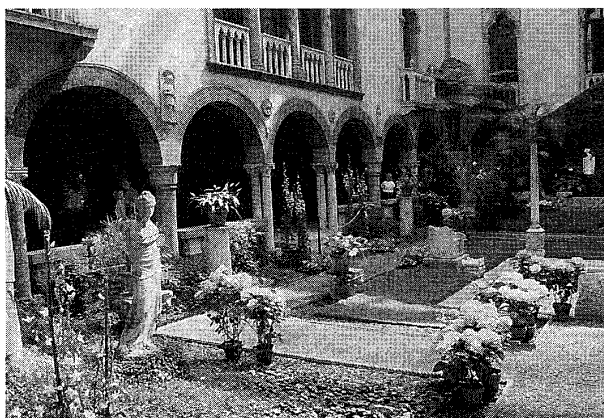


写真5 タピストリー・ルーム

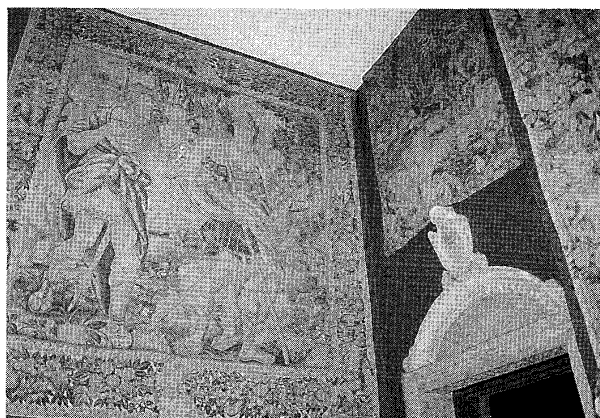


写真6 精巧なレースの数々

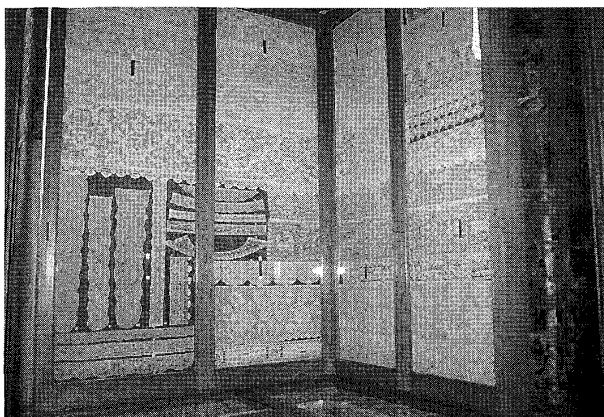
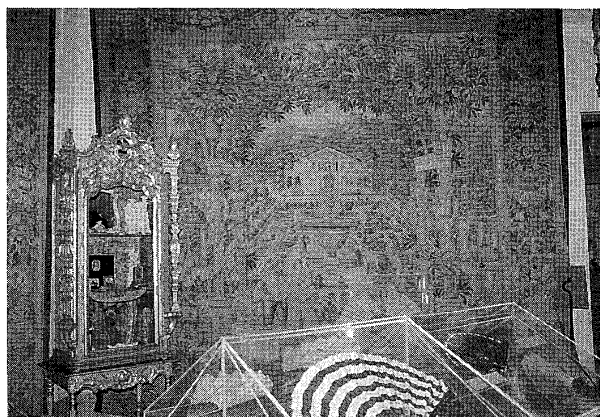


写真7 タピストリーと社交界を思わせる扇



4. セーラムのピーボディ博物館のテキスタイルデザインについて

「魔女狩りの町」として知られるセーラムは、そのイメージに反して昔ながらの家々が並ぶ可愛らしい街である。街の中心部にあるピーボディ博物館はアメリカで最も古く、海に関する収集品とアジアの美術品、民族学、自然史、考古学の5部門がある。ボストン美術館の東洋の美術部門の基礎作りに貢献したエドワード・モースが来日の折に収集した日本の明治初期の生活用品の展示室がある。ミニチュアの民家、雛人形、商店の看板、食器……等どれひとつをとっても現代に生きる私達にとっては興味深いものばかりである。日本から遠いアメリカの東海岸の小さな町でこれほど沢山の日本の生活用品や美術品に接したことは正直言って驚きのひと言であった。テキスタイルデザインも日本の藍染めや沖縄の紅型、琉球絣、筒描き、中国の印花布や刺繍など東洋のものが多い。又特別展示室では丁度プータンの織物の展覧会を観ることができたし、その後の予定として日本の民芸展が企画されていた。今年の5月に再び訪れた時には韓国のテキスタイルデザイン展を見学することができた。

更にセーラムには、エセックス・インスティテュート・博物館とその周辺にある歴史的遺産が保存されている博物館や図書館、昔のままの民家などがありインテリアデザインのテキスタイルや衣服を見学することができて当時の生活の様子が窺われて面白い。

写真8 中国の刺繍

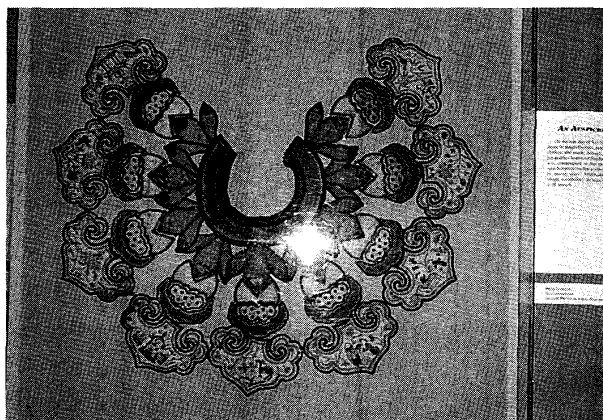


写真9 伝統的なペーズリー模様と花柄

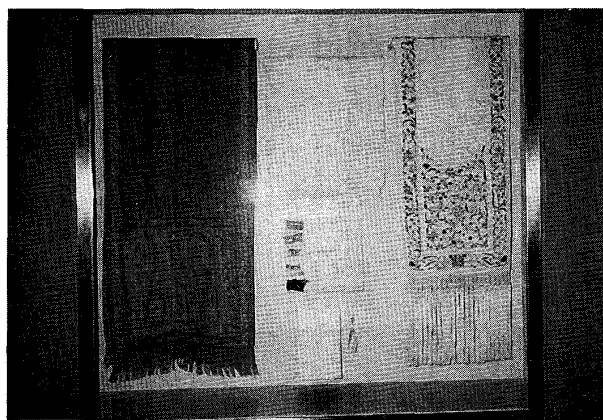


写真10 東南アジアの織物

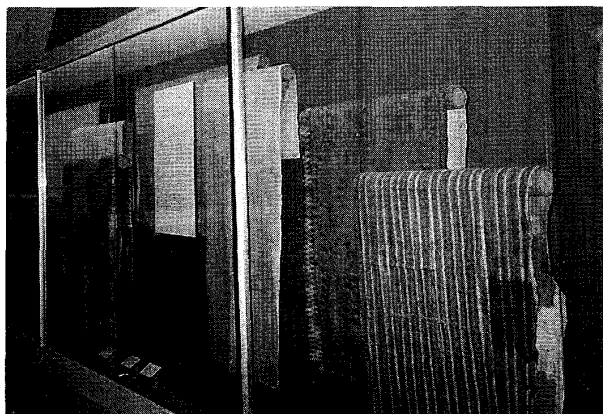


写真11 アフリカのテキスタイルデザイン



5. エンディコットカレッジの織物教室を訪ねて

エンディコットカレッジのブルードウ教授の織物教室では美術科のファッションデザイン、ファインアートの学生が織物の実習をしている。主としてウールが使われ、化学染料による色あざやかな糸が機にかかっていた。織り方も平織りや斜文織りの変化組織に、更に部分的に工夫が試みられ個性豊かな作品を見せていただいた。

写真12 ショール

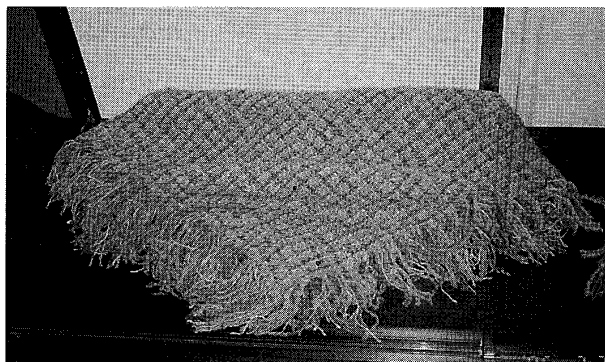


写真13 ベスト



写真14 実習室の壁に

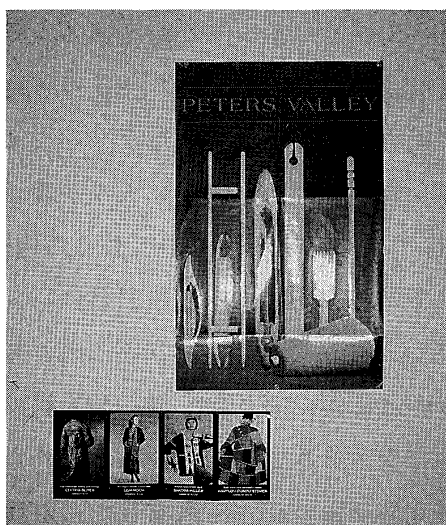


写真15 実習室風景

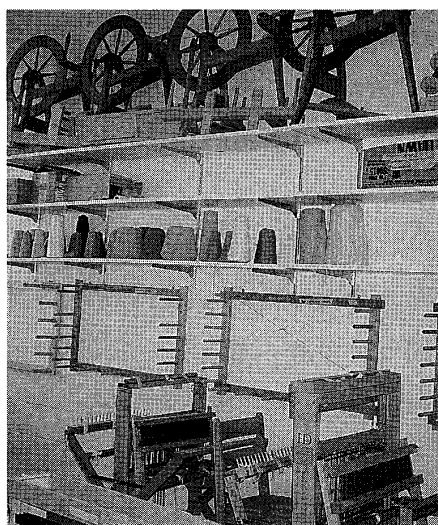


写真16 壁面装飾のための作品

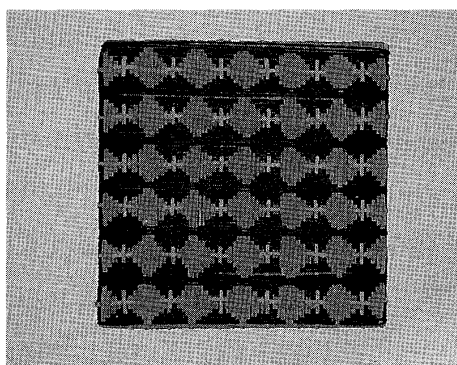
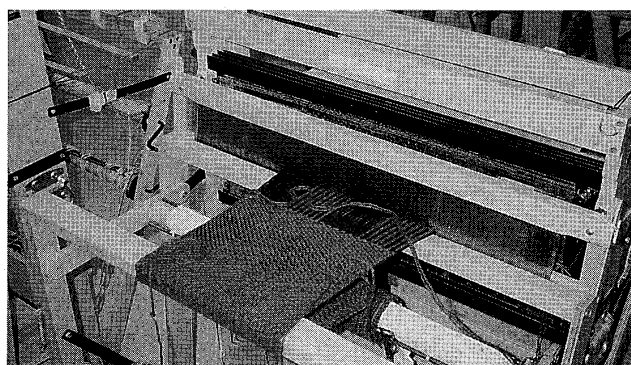


写真17 製作中の織機



6. ベバリー，ロックポート，マンチェスター・バイ・ザ・シー，デンバーズを訪れて

ベバリーは姉妹校エンディコットカレッジの所在地であるが太平洋に面した大変に風光明媚な所である。アメリカの開拓時代の映画を観ているような小さな可愛い駅を背に1本通りを越えると古い店の立ち並ぶ一角がある。その中に何店かの手作りのテキスタイルの作品をおいている所を見つけた。染織，手織り，刺繍が施されている。都会風とカントリー風が入り混った，しかしそれが程良く調和している。私はここの一軒の店で黄色味がかかったオリーブ色のフェルトの帽子を求めた。地厚なフェルト地に黒の極細の毛糸で出来たループで刺繍をしている。

このような地厚なフェルト地に更に丁寧に刺繍を施したり，頭の部分にはウール時の裏地をつけ，つばはフェルトを二重にして刺繍をしているということは，寒さの厳しいこの地方の冬を考えてのことと生活の知恵を感じたのである。

ロックポートは小さな港の町である。よく日曜画家がスケッチに集まる所でそのためか海沿いに小さな，小さなギャラリーが沢山ある。私が訪れたのはシーズンオフの時期であったがそれでも何か所かのギャラリーや手づくりの品を置く小さな店は開いていた。アメリカらしく明るい色調の絵や，染布などが目についた。染色の技法や特色については後述^{*}するがストール，スカーフなど服飾品になかなかセンスの良いものがある。（※ 研修内容7の項にて記述）

マンチェスター・バイ・ザ・シー（この町の人々は海の側のマンチェスターということに非常に強いこだわりを抱いている）は，とても，とてもチャーミングな町である。可愛い手工芸品の店も何店かあって楽しい。北米のものばかりではなくペルー，ガテマラなど南米からの手工芸品もあってそれぞれの地域の特色が見られて面白い。最後に訪れたデンバーズはリゾート地ということもあってゴルフなどでアメリカのみならず各地から沢山の人が集って来る。又，学会や経済会議などでもよく利用されるホテルのアーケードの中に手工芸品の店があった。店内にはテキスタイル関係のものもかなり並べられていた。それらは今まで目にして来たものとは少し雰囲気が変わっていた。つまり比較的素朴で土くさく，でも作り手のぬくもりを感じていた前述の各地のそれより，デンバーズで見たものは洒落た感じのものも多く私はふと数年前旅したカナダの国々の手工芸品を思い出した。色合やテクニクに類似性が認められる。

さて，以上4カ所の地域を歩き，市中のギャラリーやブティックを観察したのだがベバリーでは二軒のお宅に招かれて一般家庭のテキスタイルデザインについてもお話を伺うことができた。

一軒目は個展のオープニングにおいでになったピッチャー夫人のお宅である。この方はインテリアデザイナーとしての仕事を持っておられるのだが自らの家の各部屋が自作の手工芸品によって飾られていた。レース編みのベッドカバー，三つ編みのラグ，お孫さん達へのクリスマスと誕生日のための手編みの人形，パッチワークのクッション，ステンシルのテーブルクロス……等々，どれをみても素晴らしい，特に三つ編みのラグは学生時代に課題として10枚も製作したとのこと，デザイナーだけあって配色も素敵であった。二軒目に訪ねたのは友人エレンの家である。この方も器用な方で様々な作品を拝見した。やはり三つ編みのラグが美しく印象的

であった。尤もこの三つ編みはアメリカばかりでなく、カナダやヨーロッパ、そして日本でも馴染みの深いものではある。

材料も必ずしも新しい布とは限らず家族の使い古した衣服や寝具なども使うことがある。パッチワークもそうであるけれど思い出の布を再利用して物を大切にすると同時に生活を楽しんでいる。昨年道立近代美術館に於て韓国の刺繍美術館の作品展が開催された折、オープニングに来日した館長さんが1枚のポジャギの前で「これを作ったおばあさんはこの作品を家族の写真だと言っています。」と説明された。つまり家族の古着を使用したパッチワークのその作品はそれを使っていた時の家族の姿を写し出しているということなのだが、その話を聞いて胸が熱くなったことを思い出した。エレンの家でもこの他にキルトの大作を拝見した。家事の合間の手仕事、しかも時間と手数のかかる仕事である。でも、ひと針、ひと針心を込めて作っていく時、家族のことを思いながらきっと幸せだったことと思う。

さて、このキルトと言えばアメリカの代表的なテキスタイルワークである。長い歴史の中でアメリカの女性達と苦楽を共にして来たものと言える。中国や中近東あるいはアフリカにその源を有するが、はじめ材料はフランス、インド、オランダから輸入され、又移民の伝統的なモチーフはアメリカ・インディアン達のデザインに影響されて発展したのである。アメリカに伝わって来たヨーロッパの文化がアメリカの気候・風土に影響され、加えてアメリカ東部の人々の気質の中で特有のカラーを育てながら西部へと伝わって行ったと考えられている。当時の女性は殆どがキルトを作り今でも沢山の作品が遺されている。種類も色々あり、モチーフのパターンも多種多用である。前述のように家族で楽しむものから今では政治活動の一端を担うもの、福祉事業として活用されるもの、アートとして一作者の主義主張を語るものなど、人々の暮らしの中で生き続け、アメリカの歴史、殊に女性史を語るものと言っても過言ではない。

図4 三つ編みラグの作り方 (COUNTRY LOOK より)

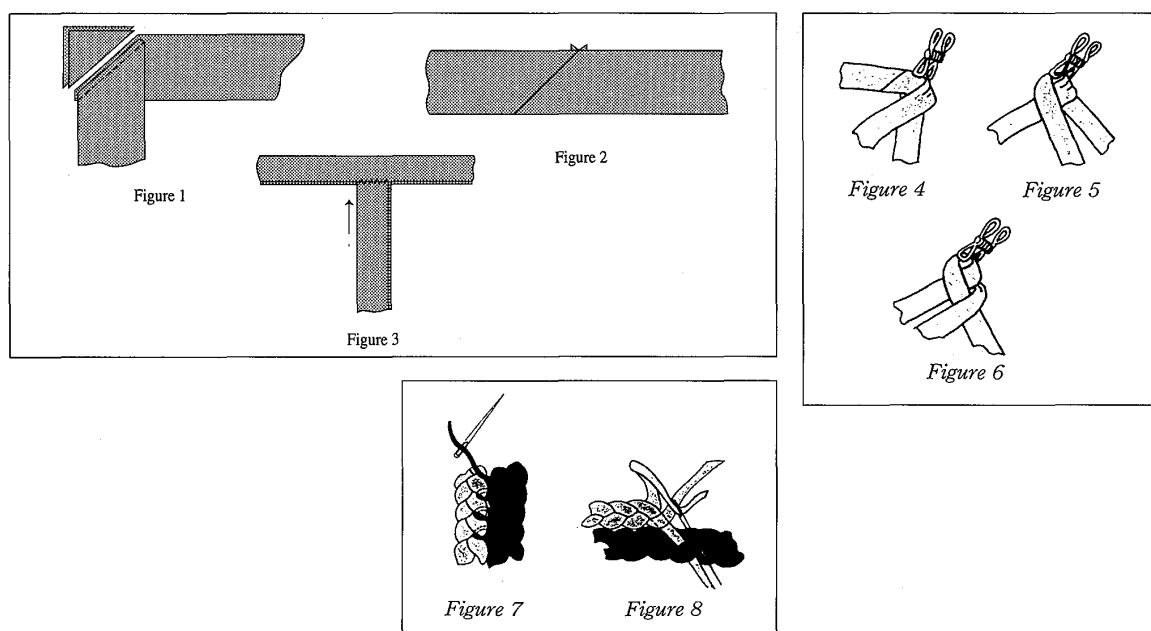


写真18 ピッチャー夫人のベッドカバー・レース

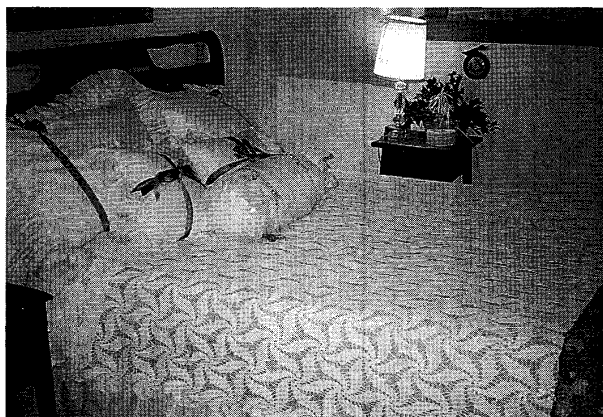


写真19 ピッチャー夫人の手作り人形

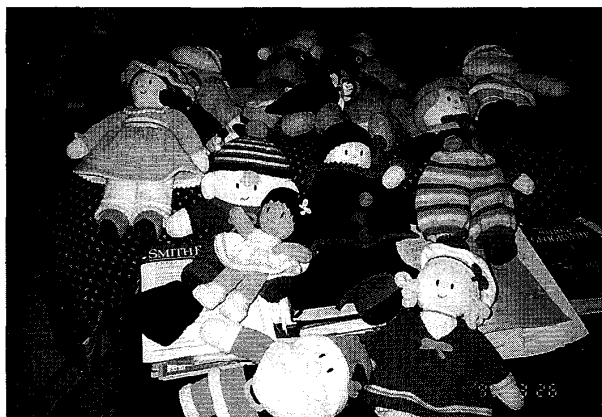


写真20 ピッチャー夫人のベッドカバー・キルト



写真21 ピッチャー夫人・三つ編みラグ

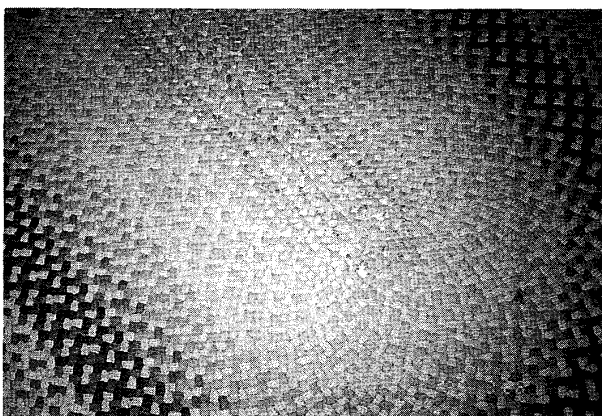


写真22 エレンさんのパッチワーク

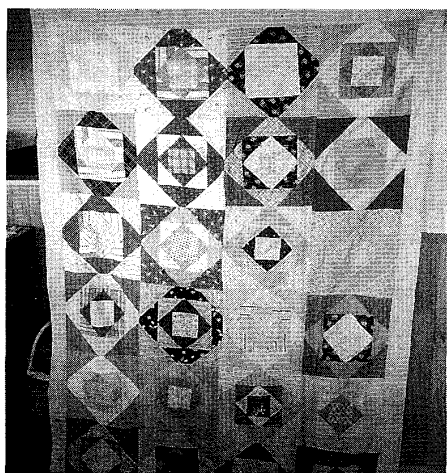


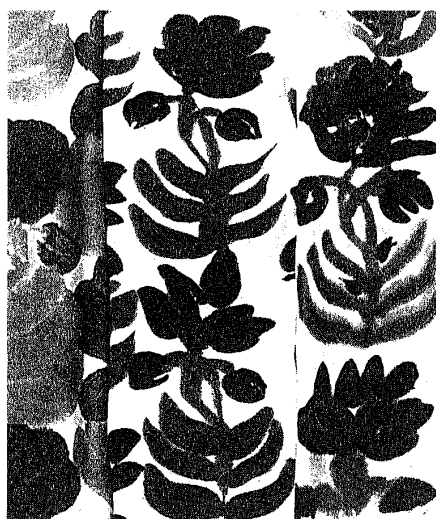
写真23 エレンさんの三つ編みラグとパッチワークのクッション



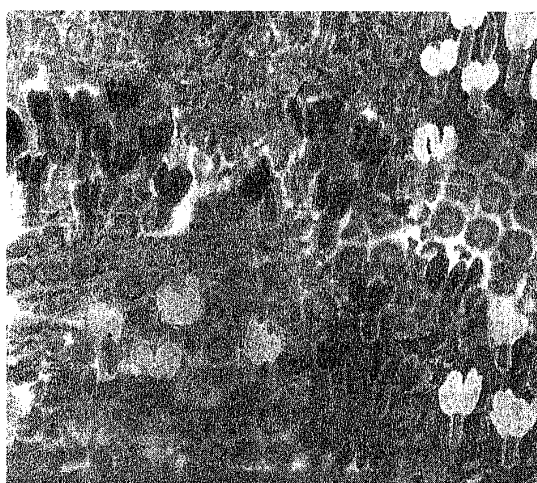
7. シルクペインティングについて

現在のこの地域の女性の人気を集めているテキスタイルワークとしてシルクを染色する新しいテクニックがある。それは染色というよりもシルクペインティングと彼女達が呼んでいるものである。シルク地に水彩えの具を用いたり、塩、砂糖、アルコール、ワックスを用いたり、道具も刷毛や筆類ばかりでなくスプレー、パイプ、ブロック、ローラー、絞り袋……等々その他クレヨンとかペン等、身のまわりにある様々なものを使って効果を狙っている。更に太陽や人工的な光線を利用したりなかなか面白い。材料も道具もテクニックも単独で行ったり併用したり自由な発想を楽しめるものである。布地もシルクであればシフォン、クレープ、ジョーゼット、サテン、ツイル、日本の羽二重、縮緬等が用いられる。材料とテクニックの違いによってそれぞれの特色のある作品となり服地、ストール、スカーフとして楽しんでいるようだ。書店には、テキストや作品集も並んでいるし、文具店には手軽に試みられるよう一式がセットになって販売もされている。私も2種類程求めて来たが教材としても役立つようである。

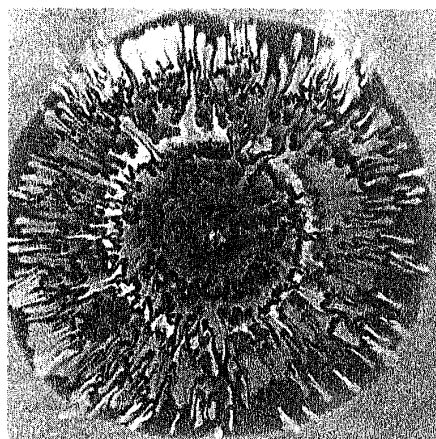
例1 水彩えの具を使用



例2 クレヨンを使用



例3 塩を使用



例4 ワックスを使用



例1～4…… SILK PAINTING New ideas and textures Dover Publications より

8. 染色作品による個展開催に関する報告

前述の通り平成7年3月、エンディコットカレッジのアートセンターに於て染色による個展を開催した。出品作品はしぼり染め、ろうけつ染め、型染めの3種類約70点を持参、展示した。オープニング・パーティをはじめとして連日、多数の方々に鑑賞していただき関心を抱かれた。特に日本の伝統的な型染めや染色による絵本とその原画に興味を持ったようである。

又、最終日には講演の依頼を受け日本のテキスタイルデザインと私自身の作品について話す機会を与えられ、私にとって大変貴重な体験となった。聴講生の皆さんから染色技術の指導を望まれとても嬉しく思った。しかし今回は時間的なこと、教材のこともあり実現は無理であったが、いつの日か日本の染色技術をアメリカの若い人達に体験していただけたらどんなに素晴らしいことかと思ひその日を楽しみにしている。

写真24 個展会場にてワイリー学長と共に



案内状印刷文

エンディコットカレッジ製作の案内状



Textile Art by Emiko Tosaka

March 19 - April 1, 1995
Endicott College Art Center, Beverly, Massachusetts

(作品 花園 ろうけつ染め
100×801cm)

Endicott College is pleased to sponsor an exhibit of works by Emiko Tosaka who has been widely recognized as one of Japan's foremost textile artists. Using stencils, tie dye and batik on silk and cotton fabric, she brings to life images of children's dreams and her homeland in Hokkaido. Her works will be on display at the Endicott College Art Center Gallery in Beverly, Massachusetts.

Emiko Tosaka has held numerous exhibits of her work in Sapporo, Rumoi, Tokyo, Paris, New York, Frankfurt, Praha, and Budapest; she has also published two children's picture books, *Mother's Treasure* and *The Birthday Tree*.

She is a professor at Hokkaido Women's College which has a collaborative relationship with Endicott College.

Textile Art by Emiko Tosaka

March 19 - April 1, 1995
Endicott College Art Center Gallery
Beverly, Massachusetts

Opening Reception with the Artist
Sunday, March 19, 1995
2 - 4 p.m., in the Endicott College Art Center

Sponsored by Endicott College, Hokkaido Women's College
and the Northern Region Fund.

Pictured on front: Garden

III む す び

テキスタイルワークを尋ねる旅は若い人達の指導者として、又実制作者としての私にとって大変に有意義であり必要不可欠なことである。「百聞は一見にしかず」とはよく言うことであるが今回も数知れない収穫があった。又、多くの方々に私自身の作品を鑑賞していただきこの上ない幸せであった。

この機会を与えて下さった北海道女子短期大学, 北方圏交流基金, 及びエンディコットカレッジに対して心から感謝の意を表して報告を終りとする。

註=参考文献 SILK PAINTING New ideas and textures:

JILL KENEDY AND JANE VARRALL, Dover Publications, Inc, N.Y.

Country Livings COUNTRY LOOK:

Mary Seehater Sears, HEARST BOOKS an affiliate of William Morrow & Company, Inc, N.Y.